

学校と保護者の間はなぜこじれる？ ～いじめの事例から～

教職員がある子供から「友達にいじめられた。」という訴えを受けました。学校としては、その子供の話をよく聞き対応したつもりでいましたが、保護者からは、学校の対応に不満があるということで厳しい指摘を受けました。学校と保護者が、うまくかみ合わずにこじれていくのはなぜでしょうか。

こじれる要因

- ①学校は、どちらの子供にとっても迅速かつ誠実な対応をしたつもりであっても、正確な事実確認ができていないことなどから、双方の保護者に十分な理解を得られない状況が起きる。
 - (例) ●児童・生徒から何度も聴き取りを行うことにより、保護者や周囲の影響を受けるなどして情報の混濁が起き、事実が分からなくなる。
 - 事実関係が不明確な中で、保護者や関係教員等の話し合いを行うため論点の相違が生じ、こじれてくる。
- ②対応の経過の中での管理職や教職員の不用意な言動が新たな不信につながる。
 - (例) ●管理職や教職員が安易に「いじめである」「いじめではない」という判断をしまいがちである。

こじれさせないために

《日ごろから》

- ①トラブルや事故などが発生したときは、管理職への報告・連絡・相談の組織的な対応を全職員に徹底する。
- ②児童・生徒同士のトラブルや事故などについては、発生時から詳細な記録を取る習慣をつけておく。

《発生したら》

- ①子供と保護者がいじめととらえている心理的事実を受け止めて丁寧に対応する。
- ②訴えた児童・生徒の話に正対して、双方の児童・生徒から聴き取り、事実を確認する。(周囲の児童・生徒からの情報も重要になる。)
- ③いじめかどうかの判断を急ぐことよりも、双方の保護者に「事実の報告」をし、話し合いの中で、学校としての対応や今後の方針を説明し、理解を得る。
- ④保護者、児童・生徒等との話し合いについては、必要以上に回数を重ねることのないようねらいを明確にし、見通しをもって行う。

いじめの定義を再確認しましょう！

個々の行為が「いじめ」に当たるか否かの判断は表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立つて行うものとする。

「いじめ」とは「当該児童生徒が、一定の人間関係にある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの。」とする。

なお、起こった場所は学校の内外を問わない。

- * 「いじめられた児童生徒の立場に立つて」とは、いじめられたとする児童生徒の気持ちを重視するということである。
 - * 「一定の人間関係のある者」とは、学校の内外を問わず、例えば同じ学校・学級や部活動の者、当該児童生徒がかかわっている仲間や集団(グループ)など、当該児童生徒と何らかの人間関係のある者を指す。
 - * 「攻撃」とは「仲間はずれ」や「集団による無視」など、直接的にかかわるものではないが、心理的な圧迫などで相手に苦痛を与えるものも含む。
 - * 「物理的な攻撃」とは、身体的な攻撃のほか、金品をたかられたり、隠されたりすることなどを意味する。
- 「文部科学省 平成 20 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より

いじめ問題は組織的に取り組む必要があります。

- いじめ問題の重要性をすべての教職員が認識し、校長を中心に組織として、この問題の解決に当たる。
- 教職員の言動や態度が児童・生徒等に大きな影響力をもつことを十分認識する。
- いじめ問題を隠さず、その解決に向けて、学校・教育委員会と家庭・地域が連携して当たる。
- いじめが解決したと見られる場合でも、継続して十分な注意を払い、適時に指導を行う。
- 家庭や地域社会に対して、いじめ問題の重要性の認識を広め、連携して、いじめの解決を図る。

「人権教育プログラム(学校教育編)
平成 21 年 3 月 東京都教育委員会」